

# 帝国とアジアの間に

## ——戦時期日本におけるウェーバー研究と中国社会論——

京都大学大学院 吉琛佳

### 1 目的

社会学の生成期における帝国主義・コロニアリズム的な背景について、これまですでに多数論じられた（例えば Mamdani 2012, George Steinmetz eds. 2013）。日本の戦時期ウェーバー研究についても、「日本のアジア侵略の正当性を学問的に確認するもの」の側面が指摘された（山之内 1999）。しかし、欧米由来の古典的社会学理論は、日本帝国主義の展開の下でいかに時局に応じながら受容され再解釈されたかについて、いまだに十分に考察されなかった。本研究は戦時期のウェーバー中国社会論研究をその典型的な事例として取り上げ、初期の欧米社会学受容と日本帝国主義の展開との関連性を批判的に検討する。

### 2 方法

安西文夫、内藤莞爾、島恭彦という三人の社会学者のウェーバー中国社会論研究を取り上げ、言説分析によってその一致性と区別を解明する。またそれぞれの研究者の言説をパターン化し、日本の大陸進出とアジア政策の文脈でその特徴を理解する。さらに、こうした理論研究の実践的な意義を理解するため、戦時期日本で行われた中国社会研究の傾向性を戦時期の学会発表に対する回顧からまとめて、ウェーバー研究との関連性を検討する。

### 3 結果

三人の社会学者のウェーバー中国社会論に対する態度の差異はこの論考によって明らかになった。安西と内藤の研究は、確かに山之内が言った「アジア諸社会の後進性と日本の先進性と対比する、という図式を精力的に展開」したものといえる。しかし島の研究はそれとは異なるもう一つの戦時ウェーバー像を示している。ウェーバーに対する誤解かどうかはさておき、ウェーバーの東洋社会論に含まれる西洋中心主義への批判が存在し、しかもそれは例外的ではなく、戦時日本の知的文脈に根ざした認識であることも本論の分析によって明らかになった。こうした対立的な言説はまた、戦時期日本の中国社会研究ではっきりしめした。

### 4 結論

欧米の場合と類似的に、戦時日本における欧米社会学への受容も帝国主義・植民地政策の展開と深くかかわった。一方、戦時日本のウェーバー研究では、欧米の場合と違う二重構造的な特徴が存在する。すなわち、侵略戦争へ正当性をもたらしたのは「進歩主義」のほか、「アジア主義」的、つまりアジア諸社会に対する共感・同情を示す側面も存在する。お互いに矛盾的とも見えるこの二つの側面は共存し、しかもそれぞれ異なる中国社会研究のアプローチとつながっていた。

### 文献

Mamdani, Mahmood, 2012, *Define and Rule: Native as Political Identity*, Cambridge: Harvard University Press.

Steinmetz, George ed., 2013, *Sociology and Empire: The Imperial Entanglements of a Discipline*, Durham: Duke University Press.

山之内靖, 1999, 『日本の社会科学とヴェーバー体験』筑摩書房.